

## 八郎湖は蘇るか？／危機と希望が交錯した夏

谷口吉光（秋田県立大学）

この夏、八郎湖の未来を考えさせる出来事が続いた。ひとつはアオコの大発生だ。八郎湖に流れ込む馬場目川から上水道を取水している八郎潟町では、八月上旬アオコのために水が取れなくなり、初めて給水制限を実施した。県は馬場目川上流部にある萩形ダムの水を馬場目川に緊急放し、アオコをとりあえず八郎湖まで押し流すことに成功した。アオコ大発生の原因は、夏の猛暑と小雨によって湖の水温が上昇し、馬場目川の水量が減ったことにあるという。

しかし、気象条件はアオコ異常発生のひとつの誘因であって、本当の原因は八郎湖の環境悪化にある。改善されない富栄養化、湖底に堆積した底泥、沈水植物や在来魚が激減して貧弱化する生態系。自然のメカニズムは複雑で、アオコの異常発生をきちんと説明することは専門家でも難しいが、これらの情報から見えてくるのは、八郎湖の生態系のバランスが崩れ、湖に棲む生き物たちが危機に瀕しているということではないだろうか。

しかし、他方で、未来に希望を感じさせる動きもあった。9月中旬、八郎湖岸に昔の植生を復元しようと地元住民が粗朶（そだ）消波堤を建設し、できあがった浅瀬に小学生たちがヨシやマコモなどの水草を植え付けたのだ。潟上市の市民団体・潟船保存会が実行する「八郎太郎プロジェクト」の2年目の取り組みだ。

現在の八郎湖岸はコンクリートに覆われ、岸辺の植物が生育しにくい環境になっている。そこで、沖合に波よけを作って土砂の流出を防ぎ、岸辺に土砂を盛り、人工の浅瀬を作ってそこに植物を植え付け、八郎潟の岸辺の風景を再現しようと考えたのだ。今年は2日間の作業に小学生50人を含む延べ170人が参加した。

今年は湖岸から沖合15メートルの地点に消波堤を作った。その結果できあがった浅瀬は、立派な「入江」のような姿になった。植え付け作業が終わって3週間後に現地に出かけてみた。流された水草もあったが、大半はがんばって岸辺に残ってくれていた。消波堤の下に手網を入れたら、ハゼ科の小魚が何匹も獲れた。「やった！」。一緒に行った学生が歓声を上げた。小さいけれど、この入江に植物が生い茂り、小魚が群れ遊び、水が澄む日が来ることを期待したい。

秋田県出身の作家・千葉治平氏は「八郎潟—ある大干拓の記録」で「今国内の湖沼で、みずうみのいのちを純粋に保っているものは一つもない。十和田湖しかり、田沢湖しかり、八郎潟しかりである」と書いている。「みずうみのいのち」とは何だろう。人々が湖を愛し、敬う心を持ち、湖に働きかけ、その結果湖にいのちがあふれ、美しい風景が蘇る。八郎湖の危機を救うにはその道筋しかないのではないか。

（朝日新聞「あきた時評」 2006年10月14日掲載分を加筆・修正した）